

庚申森住居跡

〔所在地〕 川俣町小綱木字糠塚11番地

花塚山西麓の小綱木字後沢周辺は、縄文時代遺跡の集中した地域である。古くから知られた大日平遺跡を中核として、荒沢、関場山、五木内、所久保、糠塚、後沢、油畑の遺跡が相連なり、縄文時代中期から晩期にかけての後沢遺跡群が構成されている。

後沢遺跡群の南西に位置する糠塚遺跡内に庚申森住居跡があり、昭和36年6月に発掘調査さ



小綱木字糠塚地域

れた。住居跡は柱穴が確認されていないのでプランは明らかでないが、経約0.6mのほぼ正方形をした石組炉と、2個の土器埋設炉の石囲いが一線上に並ぶ複式炉、および炉の周囲に花崗岩の敷石が確認された。石組炉には大量の灰と木炭が堆積し、石は高熱を受けており炉に使用されたことが認められた。石組炉の南1m地点から埋設土器が出土している。炉に用いられた埋設土器は、深鉢型土器の胴部と口縁部を欠いた甕型土器が用いられ、斜縄文と隆起線、沈線で区画された磨消縄文が施された中期末期の大木10式期と考えられる。



一直線に並んだ石組炉、土器埋設炉と敷石（庚申森住居跡）

細越遺跡（大字鶴沢字細越）も、土器埋設炉2個と石組炉をセットした複式炉を持つ堅穴住居跡である。複式炉を持つ住居跡は、縄文時代中期末葉に福島県内を中心に発展した。そのなかで庚申森住居跡は、敷石を附随した数少ない遺構として貴重な存在である。

川俣の縄文遺跡は、県北地方で最古の土器である「日計式」押型文土器を出土した北ノ俣遺